
おとーさん（略） シンデレラ

呪理阿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おとーさん（略） シンデレラ

【Nコード】

N 4 3 3 5 W

【作者名】

呪理阿

【あらすじ】

昔話ばかり話してきたおとーさんが今回語るはシンデレラ！ いや、やっぱりある意味昔話だけどさ、ほら、海外進出だよ！ ね？ 四人兄妹の末っ子、光に頼まれたらおとーさんは断れない？ 眠いけど結局話す羽目になりました。「どうしてうちの娘は『尾も白い』で納得してくれないんだろう……」とはおとーさんの言葉。そんな話で満足する子供がどこに居る。ちなみに没ネタ、シンデレラの言葉。「べ、別に王子と結婚なんかしたくないんだからねっ！」内容が思いつかなかったから没にしたんじゃないんだからねっ！

「お父さん」。お話して」

「ごめん、今日は眠い……」

「私が眠れないの」

おとーさんは関係ないぞ？

名も無き父だ。最近娘に名前何だっけと聞かれて凄く傷ついた哀れな父親だ。

誰か慰めて！

「お父さん」

「うん……お姉ちゃんとお兄ちゃんがまだ遊んでるから混ざっておいで」

『ぶくぶく』とか『深爪え』とか聞こえてくるからきつと、娘が息子『で』遊んでるんだろ？なあ。おとーさんも混ぜろ。ああでも眠い。仕事疲れた。

「それは明日にとつとくの。お話」！

むむ……仕方がない。

昔々、あるところに。犬が居ました。

「その犬は尻尾も白いので尾も白い」、なんてつまらない話は止めてよ？」

ちい。

昔々、ヨーロッパのどこか。

お金持ちのお父さんと、その娘がおりました。

ある日、お母さんを亡くした娘の所に、新しいお母さんと、二人のお姉さんがやってきました。

「シンデレラだね」

その新しいお母さんは、安っぽい服を好み、ヘルスイーな料理を好み、家政婦さんを皆辞めさせて家事を自分でやりました。

「全然違うね」

お父さんは、いい妻だとかなんとか言って、しばらくしてぽっくり逝ってしまいました。

「なんとかの部分には何が入るの〜?」

「ご自由にお考えください。」

お父さんの葬式の後。

とても悲しんだ新しいお母さんは、貯め込んだ金を急に使い始めました。

「悲しんでるの〜?」

娘は、三人の世話をする羽目になってしまうのでした……ぐう。

「お父さん〜。続き〜!」

あう。

ある日、家に四枚の招待状が届きました。

『王子の妃を選ぶんだってよ。ん、興味ねえ。つつかめんどくせえ』

『わー、あたしってばえらばれちゃったらどーしよー。どーもしないけどー。行く気もしないけどー』

『私だってまだまだ若いのよ……二児の母だからって……負けないわよっ! あああなた、見守っていてね!』

『ふむ……王子の妃、という事は未来の王妃? 一生楽して暮らせる? おおおおお、すげええええええ!』

上から、長女、次女、母、娘(一応シンデレラ)です。

『……あのね〜。上から純お兄ちゃん、お姉ちゃん、シンデレラのお母さん? 岳お兄ちゃんみたいな言い方だったんだけど〜』

気のせいだ。

「そうかな〜?」

気のせいなの。

三日後、お城で舞踏会が開かれました。

『さあ! 行きますわよ!』

『ん、めんどくせえから行かねえ』

『またあなたはそんなこと言って! 立派な貴婦人になれませんか?』
『よ!?!?』

『なりたくねえ』

『なんてこと！ ああ、なんてことでしょう！ 紙よ！』

新しいお母さんは泣きながら、丸めた紙に叫びます。

「……紙？」

そこはスルーの方向で。

『じゃ、あたしも行かない。舞踏会とかつまんない。人ごみイヤ』

『あああああ！ なんてことでしょう！ 二人目の娘まで！ 背に腹は変えられませんわ！ シンデレラ！』

新しいお母さんは半狂乱になりながらシンデレラを呼びます。

『準備OK！ いつでも行けるぜっ！』

シンデレラはリュックを背負い直し、真っ白な歯をきらーんと光らせます。

「誰？ なぜにリュック？」

『腕が自由だから、いくらでも食えるぜ！ 腹も減った！ 行くぜ母さん！』

さて、シンデレラは何のための舞踏会か分かっているのでしょうか？

「わかってない」

お城に着くと、

「魔法使い出番なかったね」

皆がダンスしている中、一人ガツガツとたっかい料理を食べているシンデレラが居ました。

「見てて痛いね」

そんな、自分の妃の座をどうでもいいことのように食べ続ける彼女に、王子は嬉しくなりました。

そして、

『お嬢さん、一曲お相手願えますか？』

「私口調？」

軽く後ろでまとめられた黒髪が、無駄にさらさらと音を立てます。
「無駄にって言わないでよ」

イケメンは嫌いだ。

「純お兄ちゃんは？」

好青年風のイケメンは嫌いだ。

「……続きは？」

シンデレラは、

『今んぐんぐ、オレ忙しんだよあむあむ。ほら、相手なら母さんにしてもらあむむぐっ』

しかし、その新しいお母さんはちょうどトイレに行っていたのでした。

「何してるのお母さん」

『ほら、そんなこと言わずに。私と踊りましょうよ』

シンデレラは逃げました。

「ダメでしょ」

ブドウを食べながら、まずはシャンデリアの上にガシャン！

「跳躍力凄い」

続いてどこぞの伯爵の太ったお腹でばよんっ！

「そのお腹はトランポリン？」

最後には王子様へ愛のキック！

「王子様かわいそ。愛の無いキックの間違いじゃないかな」

そして、シンデレラは残った料理を大きなランチボックスに詰め込んで、帰りました。

「意地汚いな」

『にーちゃん！ねーちゃん！』

「もうモロにお兄ちゃん達じゃない」

『おおっ！こんなにいっぱい持って帰ってきたの！？』

『でかした』

女の子のくせにズボンばかりはいている長女はぱくぱくとシャツを出して着ているだらしない長男は本を読みながら。そしてシンデレラは第二弾を取りに行く間にもぐもぐと。

三人はお腹一杯、美味しい料理を食べたのでした。

おしまい。

「えっとな〜。言いたいことがたくさんあるの〜。

1、お母さんどうしたの〜？

2、性別最初と最後で変わってるよ〜。

3、私は蹴られて終わりってどうなの〜？」

「1・お母さんは無事、王子様と結ばれました。

2、子どもたちネタは途中で思いついたんだから仕方ない。

3、光は蹴られたんじゃない。光は……ほら！ ランチボックス

だ！ 大活躍！」

そしておとーさんは殴られましたとさ。痛い。

（後書き）

もう、とにかくノリで書きました！

こう突っ込んだよ！　って方、教えてほしいです。

ご意見、ご感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4335w/>

おとーさん（略） シンデレラ

2011年9月5日03時30分発行